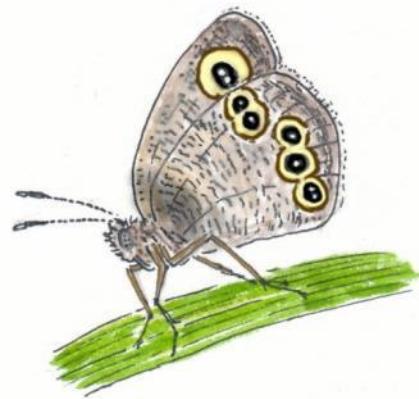




地味チョウシリーズ⑫

ヒメウラナミジャノメ
Ypthima argus



はじめに

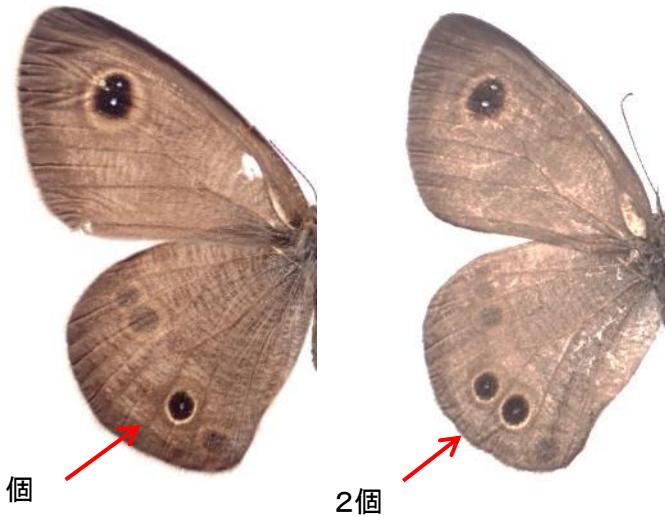
ヒメウラナミジャノメはド普通種で美しくもなく地味チョウシリーズの横綱格。まともに集めたり観察したりしているチョウ屋はなかなか稀有な存在でしょう。本当に日本全国どこにでもいます。なぜこんなに普通種なのか聞きたいくらいです。そんなチョウですから、私も「完本」制作まではほとんどスルーしていました。いざこの蝶について「図鑑」で私の担当で解説をする段になってちょっと焦りました。成虫や幼生期の生態は兄に大半書いてもらいました。我が家の周辺にも毎年ワンサカ発生するのですが、普通種たるゆえんは様々な空き地に生えている、イネ科カヤツリグサ科を好き嫌いせず食べているからなのでしょうか。そうだと思いますが、それをはっきりさせることもスルーしているのです。ということで中途半端な観察記録になることをお許しください。



「蛇の目」の個体変異

表面の「蛇の目」の変異

今まで撮った生態写真を見ていると、ヒメウラナミジャノメの「蛇の目」についていろいろあるのが改めて面白いなあと気づき、手元にある富良野の標本を調べ撮影した写真を少し並べてみました。結構個性があり面白いのです。「完本」にも裏面の「蛇の目」(眼状紋)の変異紹介していますが、よく見ると翅の表の後翅の「蛇の目」1個しかないのを発見し、裏面もよくみると、ジャノメの数や発達度合いが様々なのがわかります。異常型やら個体変異はあまり気にしてはいなかったのですが、これから少し気にしてみようかなと思います。



裏面の「蛇の目」の変異



前翅2 後翅4

前翅1 後翅4, 5

前翅1 後翅5

前翅1 後翅5大

前翅1 後翅4+2小

前翅1 後翅6大



生態① 庭で吸蜜～産卵

ヒメウラは我が家周辺にもたくさんいます。ジョウザンシジミ用に玄関前に植えたキリンソウの花が咲くころが特にピークで吸蜜にたくさん集まります。そんな中1頭の♀が産卵を始めました。吸蜜したり日光浴したりしながら、時々草むらに潜り込んで、食草とは限らずあちこちに卵を産み付けます。産卵している場所はスズメノカタビラや外来種のシバが生える雑草地帯ですが、その後の幼生期については情けないことに確認していません。

翅を広げて休息



産付場所を探す



キリンソウに群がる 2011.7.10

クローバーに産み付けられた卵
(このページすべて同日の写真)



シモツケソウで吸蜜



枯草に産卵



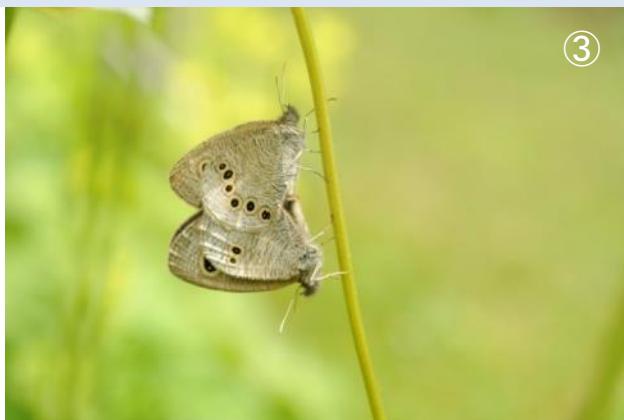
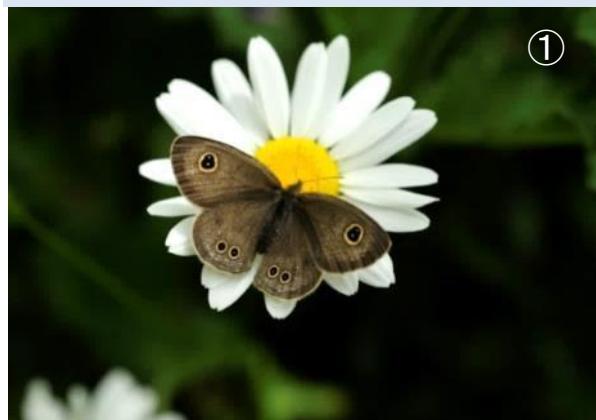
生態②2化個体の吸蜜・産卵

ヒメウラは6月下旬頃から7月に我が家の庭周辺で発生しますが、2化個体も8月下旬から毎年のように出現します。遅くは10月初めまで生き残ります。各種図鑑では道南で2化とありますが、富良野は温暖な土地なのでしょう。



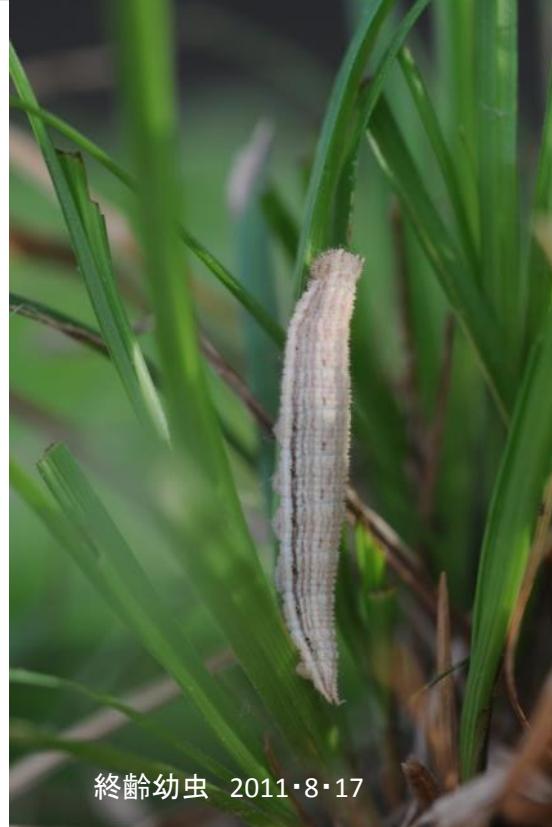
生態③ 求愛～交尾

我が家の庭での観察の続きですが、吸蜜が終わると♂はいつもせわしなく飛び回っていますが、メスは不活発です。♂は♀を見つけると後ろから近づきます。腹端を曲げながら♀の腹端に向かっていきます。私は写真に収めることはできませんでしたが「完本」には兄の一連の写真が載っています。交尾個体は♀が発生し始めた2017年6月23日に見ることができました。写真番号順に紹介します①(11:26)フランスギクで吸蜜していました。目を話した1分後②(11:27)あっという間に交尾していました。③(11:28)♀(後翅目玉6個)は吸蜜を止め移動。④(11:30)ちょっと悪戯して手乗りに。⑤(11:32)嫌がって飛び出し窓に止まる。⑥(11:37)また少し飛んでススキの葉の上に。この間目玉6個の♀が♂を引き連れて飛んでいます(←♀+♂)。完本の兄の観察では←♂+♀とあり、写真もそのように見えます。「生態図鑑」にはすべて←♀+♂とありますが、どちらの場合もあるようです。



生態④ 幼生期・飼育編

幼生期の記録に入ります。冒頭に記したように、この普通種についての幼生期の記録は非常にさびしいものがあります。「完本」ではとりあえず飼育することで幼生期の姿を載せることにしました。2011年から16年にかけてのことです。植木鉢のネット掛けで採卵し、夏から翌春の蛹まで何とか追うことができました。兄が指摘していたように、間に活動し屋間はもっぱライネ科の枯れた根際に潜り込んでいます。幼虫も見事な擬態で見つけるのは難しいことだけはよくわかりました。あとフィールド版には全種の卵の写真も載せましたが、芝田さんが撮ったヒメウラの卵には感激しました。ここで再度載せておきます。



3歳幼虫 2011・8・19

生態⑤野外幼生編

幼生期の野外生態の記録です。あの「生態図鑑」でも野外の幼生期の写真は掲載されていませんでした。それでも「道新本」には兄撮影の見事な野外終齢と蛹の写真があります。いずれもナミヒヨウモンの幼虫を探していた時に偶然見つけたとのことです。それぐらいこの普通種の幼虫や蛹は見つけづらいのです。なぜみつからいのかはやはり夜行性だからなのです。それを夜に強い(?)相棒辻氏が解説してくれました。ジャノメの幼虫を追いかけていて見つけたそうです。葉に上って葉をむしゃむしゃ食べています。なるほどそうなのか、やっと幼生期解説の糸口が見つかりました。



5・24 札幌市真栄
終齢幼虫 (1985)

「道新本」から(兄写真・右も)



夜間調査中(辻氏)



茎に下がった蛹 (1985・6・12 札幌市真栄)

葉を食べる (同右)



葉に上ってきた亜終齢 2018・5・10
千歳市(辻氏写真)



生態⑥食草・越冬について

兄や相棒の観察記録を紹介してきましたが、私の乏しい記録も紹介します。ひとつはシリーズ⑪シロオビヒメで紹介した東川キトウシ公園での発見です。シロオビヒメの越冬前幼虫を探していたところ枯草部分に上っていた幼虫を偶然見つけました。食草はイネ科のハガワリトボシガラ。ずんぐりしていていかにも越冬前という雰囲気が出ています。もう一つはアポイでウラジヤの幼虫探しをしていたところアポイ山荘の近くの山裾で終齢を見つけました。食草はあとからヒメチャの保全でもお世話になっている佐藤謙先生に確認してもらいましたがカヤツリグサ科のショウジョウスゲでした。やはりヒメウラは広食性(ジェネラリスト)です。普通種になれるベースでしょうね。

アポイでの食草ショウジョウスゲ



越冬前の亜終齢幼虫 2011・8・17
東川町(左写真も同)



昼間に葉に上っていた終齢 2015・5・13 様似町



ヒメウラはド普通種ですがこのように幼生期の生態情報は稀種のように少ないので。同属のウラナミジャノメもバイブル「生態図鑑」をみても同じような生態稀種です。兄は「道新本」でこのことに触れ、「～日中は食草の根際の枯葉などの間に潜んでいて、色彩も枯葉に似ていることと、触れるとすぐ転がり落ちて、かなり長い間動かないことなどが原因であろう。」と書いています。そうだと思います。褐色系のジャノメ幼虫はやっかいなのです。そこで本編にも紹介した辻氏の、本種の他ジャノメ・ヤマキマ・サトキマ・ベニヒカゲなどで次々成果を上げている夜間観察は「風穴を開ける」観察法だと思います。夜に弱い私も頑張らなくてはと思っています。



To be continued